ISSN 1342-3932

名古屋大学 大学史資料室ニュース

NUA Nagoya University Archives

Nagoya University Archives News　第15号

目次 Contents

八高生青春像と郁達夫文学碑 ―― 2
資料室だより ―― 5
資料室日誌（抄） ―― 7

八高生青春像と郁達夫文学碑（本文２～４頁参照）

八高生青春像と郁達夫文学碑

大学史資料室長　加藤　鉦治（詔士）

1. 名古屋大学の記念碑・記念物

『博士の肖像』と題した、一風変わった本がある。木下直之編『博士の肖像、人はなぜ肖像を残すのか』（東京大学出版会）がそれである。東京大学で教鞭をとった人たちの、学内にある肖像彫刻と肖像画を選んで編んだ図録である。像主は総勢121名、ここには外国人教師も13名含まれている。東京大学を築いた人びとといってよい。

同書には、制作年、寸法、技法、材質、所蔵先などといった基礎データに加えて、それぞれの像主および制作者の略歴も記されている。この略歴紹介が、短文であるけれども有益である。明治時代に、東京大学がいかに日本の教学の中心であり、またいかに外国人教師に依拠していたかがうかがわれる。学内の文化遺産を網羅的に調査し、それを歴史的に意味づけた意義は大きい。

名古屋大学には、『博士の肖像』に相当するような、学内の文化遺産についての本格的な調査研究と報告はまだみられないように思われる。けれども、少しばかりの調査なら試みられ、その成果は広報誌『名大トピックス』のなかで、順次、披露されている。「ちょっと名大史」という、気のきいた題目の連載コラムである。

連載は事務局総務部企画広報室の発案で始められたもので、肖像彫刻や肖像画にとどまらず、名古屋大学の歴史にかかわる記念碑や記念物を、カラー写真と地図を添えて紹介している。大学史資料室はこの企画に協力し、トピックの選定および説明文の執筆を担当している。

これまでのところ下記のようなトピックスが取りあげられており、大学改革の名のもと日々あらたな施策が展開される今日にあって、往時を追懐し将来を展望するよすがになっている。

①香菓園（かぐのこのみのその）と愛知医科大学予科歌碑
②渡邊龍聖名古屋高等商業学校初代校長の胸像
③第八高等学校の正門
④「岡崎高等師範学校跡」記念碑
⑤名古屋県仮医学校・仮病院跡
⑥仮病院（愛知県病院）・医学講習場跡
⑦愛知県立医学専門学校跡
⑧豊田講堂
⑨古川総合研究資料館（旧古川図書館）
⑩シンポジオン（創立五十周年記念施設）
⑪八高寮歌伊吹颪（おろし）歌碑
⑫医学部附属病院分院（東新町時代）
⑬鬱金桜（うこんさくら）
⑭農学部第一回卒業記念樹
⑮名高商栴檀（せんだん）と樟（くすのき）
⑯郁達夫文学碑
⑰伊藤圭介胸像および「伊藤圭介先生誕生之地」碑

この連載が機縁となって、学内外にある名古屋大学史に関する文化遺産情報の集積と教育・研究への活用が一段と進展することを期待している。その成果はやがて『名古屋大学の歴史探訪』、あるいは『記念物でたどる名古屋大学史』などと題してまとめ直し、広く社会に公開する予定である。これによって、教職員・学生を問わずすべての本学構成員、さらには同窓生のアイデンティティ形成が促され、ひいては地域社会におけるユニバーシティ・アイデンティティが培われると思われるからである。

2. 第八高等学校の記念碑

（1）

名古屋大学のばあい、教師の肖像彫刻とか肖像画とかいうなら、渡邊龍聖名古屋高等商業学校初代校長の胸像、勝沼精蔵第三代総長の胸像、伊藤圭介胸像などが知られているが、教師の記念物ではなくて、学生を素材にした記念碑があることに注目したいと思う。「八高生青春像」および「郁達夫文学碑」として知られる記念碑がそれである（表紙写真）。いずれも旧制第八高等学校の卒業生でつくる八高会が中心になって企画し、同校の創立八十年記念祭実行委員会と創立九十年記念祭実行委員会の手で、それぞれ建設された。

まず、八高生青春像は名大構内ではなくて、名古屋市立大学の山の畑キャンパス（名古屋市瑞穂区瑞穂町）

に建っている。同キャンパス内の北東の、剣ケ森といわれる小高い丘にある。ここはかつての第八高等学校の校庭であった。

八高生青春像は、八高の創立80周年を記念して、その思い出の地に建てられたのである。明治41（1908）年９月の開校から80年目にあたる、昭和63（1988）年の10月８日に除幕された。

等身大の青年の彫像であって、学生帽・学生服に高下駄、厚いマントをひっかけている。青年はいかにもりりしい。腕組みをしている。マントを小粋にひっかけ、これから市街を闊歩して高歌放吟しそうな雰囲気である。「八高卒業生の在学時の希望に燃える青春の姿を後世に伝え」ようという願いから建立されたといわれるが、現在の学生に対しても、のびのびとしておおらかな学園生活を奨励するにちがいない。「八高八景」とか称して八高の存在を後世に伝える記念物は数々あるけれども、この八高生青春像こそ八高を末長く確かに伝えるのにふさわしい。

像の台座は黒御影石の本磨き仕上げである。その台座の碑面には、「わが友　若き旅人よ」と彫られている。八高寮歌「光のどけき」からとった一節である。ちなみに、台座の碑陰には、つぎのような説明文が刻まれている。

「第八高等学校は明治四十一年（一九〇八）九月開校　明治・大正・昭和にわたり　九千四百余の若人がここに学び　学制の改革によって昭和二十五年（一九五〇）三月閉校した

創立八十年にあたり　八高生青春像『わが友　若き旅人よ』を建てて永く記念とする

昭和六十三年（一九八八）十月八日

八高創立八十年記念祭実行委員会

会長　横山秀吉」

（２）

八高生青春像は母校によせる卒業生の熱き思いの結晶であるが、建立に至るまでには数々の苦慮がありエピソードがある。

八高創立八十年記念祭の事業の一つとして記念モニュメントを建設することに決まりはしたが、何を制作したらいいのか。久遠の乙女像か、希望に燃える男性の青春像か、オベリスク風記念碑ではどうかなどと検討を重ねたすえ、最終的には「マント姿の八高生の等身大のブロンズ立像」とするということになった。

制作者は石田武至氏。日展彫刻家で名古屋芸術大学教授でもある氏は、後述する「郁達夫文学碑」のレリーフの作者でもある。モデルの適任者さがしについても苦慮されたようだが、これは石田氏の高校一年生の長男が選ばれた。

そのモデルのポーズをきめるにも慎重が期された。６月のそろそろ暑くなる時期に、「学生服に高下駄をはき、厚いマントを着てスタジオの熱いライトの下でいくつものポーズ写真をとる。一回につき四時間くらいかかり、今の姿をきめるのに四晩費やした」と伝えられている。

旧制高校生にはマントが似あう。マントはまことに風情がある。もっとも、モデルに使われたそのマントは、八高のものではない。実は、旧制松本高校のマントが用いられた。それも大きめの分厚いマントが選ばれたのだから、どっしりとした重量感があり、バンカラの風がよくかもしだされている。分厚いマントをということで、寒冷の地にある旧制松本高校のマントが調達されたのである。剣持一郎氏（本学教育学部卒業生）が協力され、母校の旧制松本高校時代のマントを郷里から取りよせ提供された。氏は大小二つのマントを大切に保管されておられるが、そのうちの大きいマントが用いられたということである。

八高生青春像はミニチュアも制作され、関係者や希望者に頒布された。実像の五分の一の大きさであって、そのうちの一体は、博物館明治村にある、第四高等学校物理化学教室の一隅に静かにたたずんでいる。

なお、名古屋市立大学山の畑キャンパスの、八高生青春像が建っているうしろの、小山のいただきには八高跡地碑がある。２メートル四方の台座のうえに、30センチ角の花崗岩の柱石があり、正面に「第八高等学校所在之地」と刻まれている。右側面には「第八高等学校」という門標が、左側面には「昭和三十三年六月一日　八高創立五十年記念事業実行委員会」と、深々と彫られている。

「八高生青春像」のミニチュア

この八高生青春像については、『わが友若き旅人よ、八高八十年祭記念誌』（1988年）や『忘るる勿れ丘の日を、八高八十年祭記録』（1988

年）に詳しい。記念祭の事業記録が実に詳細にまとめられており、八高会の面々の母校に寄せる熱い心が感じられて感動を禁じえない。記録史料に対する誠実な姿勢に感服させられる。

なお、八高すなわち第八高等学校とは、明治41（1908）年に、文字どおり全国で八番目にできた旧制高等学校である。昭和24（1949）年に新制大学が発足するさい、名古屋大学に包摂された。旧教養部の前身にあたる。

3. 郁達夫文学碑

（1）

学生を素材にしたもう一つの記念碑・郁達夫文学碑は、本学の豊田講堂東側の庭園にある。本学にある唯一の文学碑と思われる。

郁達夫（1896－1945）といえば、魯迅や郭沫若とならぶ中国人作家であって、『広辞苑』に登場する数少ない名古屋大学人である。初版（1955年）から登場し、最新版（第５版）ではつぎのように記載されている。

「いく・たつふ〔郁達夫〕（Yu Dafu）

中国の文学者。名は文。浙江の人。東大卒。郭沫若らと創造社を興す。北京・武昌師範・中山大学に歴任。終戦直後スマトラで日本憲兵に殺害される。作『沈淪』『薄奠』『春風沈酔的晩上』など。（一八九六－一九四五）」

その郁達夫の文学碑が本学にあるのは、かれが大正４（1915）年から４年間、中国人留学生として、第八高等学校に学び多感な青春の日々を過ごしたこと、しかも、大正期の名古屋を舞台に、八高時代の体験をもとにした青春小説『沈淪（ちんりん）』を後年あらわし、これが出世作になったこと、などにちなむ。

『沈淪』といえば、「青春の煩悶という題材を取り上げた近代文学らしい作品」として知られている。青年の素直な感情が大胆に綴られている。近代中国文学史上、青春小説の先駆で、中国ではじめて「青春」という言葉を用いた自伝的小説といわれる。

郁達夫といっても、あまり知られることがなかったが、1980年代になって見直しの機運が高まった。『広辞苑』では、第３版（1983年）から『沈淪』がかれの代表作の一つとして加わっている。母国でも文名いよいよ高まった。そのようななか、仙台（東北大学と青葉城址）には魯迅の、岡山（旧制第六高等学校跡と後楽園）には郭沫若の記念碑があるのだから、名古屋には郁達夫の碑を建て顕彰したいとの声が強まり、八高会が計画して、実現をみたものである。

（2）

顕彰は八高創立八十年祭のさいにはじまり、まず『郁文達夫　留東遺芳』（郁文は本名）が発行された。小説『沈淪』と漢詩篇をあわせて一冊とし、これに年譜、関連の新聞記事などが添えられている。八高に関連深い作品が精選されており、八高での生活体験、八高近辺の風物や風光が描かれているから、本学の歴史上、学興味深いものがある。

ついで、創立九十年記念事業の一つとして文学碑の建設が決議され、実現に至った。平成10（1998）年６月30日の除幕式には、中国から遺族や関係者も出席した。この日、日中両国の研究者が参加して、シンポジウムも開かれている。

郁達夫文学碑は、中国福建省厦門産の御影石が使われている。碑面には「沈淪」という文字と郁達夫のレリーフとが並んでいる。レリーフは、前記のように石田武至氏の作。碑陰には、八高の徽章とともに、つぎのような由来文が刻まれている。大池青岑氏（本学文学部卒の書家）の筆による。

「郁達夫は　一八九六年中国浙江省富陽県で生まれ幼少より学才に秀でていた
一九一三年来日　一五年八高に入学　二一年発表した小説沈淪は　八高在学中の青春の思い出を綴った中国近代文学の名作である　帰国後文壇で活躍し魯迅　郭沫若らと並ぶ大家として評価が高い　惜しくも四五年殉難
名古屋にゆかりの深い作家郁達夫を記念し　八高の伝統を継承する名古屋大学にこの碑を建てる
一九九八年六月
第八高等学校創立九十年祭実行委員会
題字　横山秀吉書
彫塑　石田武至刻
碑文　大池青岑書」

レリーフは、八高卒業時の写真を元に制作されている。制帽と丸いメガネ姿の若き郁達夫であるが、ときおりメガネのないことがある。郁達夫が自在にできるわけでなく、いたずらされてひきちぎられたのである。メガネをつけ直すとまたとられる、こんなことが二度三度ある。

八高生青春像と郁達夫文学碑。いずれも本学の包摂校である第八高等学校にかかわる記念碑であるが、母校への深い愛情と情熱に発したこのような記念碑こそ、本学同窓生のアイデンティティ形成の一助となるはずである。

資料室だより

○第２回　大学史資料室ワークショップ「アーカイブズのすすめ」平野俊幸氏講演「福井県文書館の設置について」を開催しました。

大学史資料室では2003年３月３日、名古屋大学国際開発研究科多目的オーデトリアムで、第２回ワークショップ「アーカイブズのすすめ」として、福井県文書館職員平野俊幸氏に「福井県文書館の設置について」と題して、講演をしていただきました。福井県文書館は2002年２月１日に開館した新しい文書館であり、その設置経緯や内容・課題などについての最新の情報を、この地域の文書館や歴史資料を管理する施設関係者の方々に知っていただくとともに、文書館のこれからについて意見交換を行いたいというのが、今回の目的でした。参加者は約90名でした。

内容については、県史の編纂過程で文書館計画が立ち上がったが、一時停止を余儀なくされたが、その後、新図書館計画の中で新たに図書館との合同施設として実現した。そのため運営的に一部は不便な面もあるが、一方で図書館の歴史的貴重書も同じ館で閲覧できる体制をとりつつあるなどの利点もある。また、新たな試みとして、情報公開担当部署と連携を諮っているなどを、報告していただきました。

講演後の質疑討論も、文書の破棄基準や方法などについて、質問などが活発に行われました。

○名古屋大学国際フォーラム特別展示
『名古屋大学の軌跡　―国際社会との知的交流―』
がCD・パンフレットになりました。

昨2002年６月23・24日に開催された『名古屋大学国際フォーラム』のサテライト企画として、同21～25日に本学豊田講堂ロビーで当室が行った上記特別展示についてのCDおよびパンフレットが出来ました。内容は、本学における過去と現在の国際交流活動の一端を知っていただけるよう、外国から招聘した教師や留学生を中心にまとめています。日本語・英語の両方で説明が書かれていますので、留学生の方にも利用できるようになっています。目次は下記の通りです。

ごあいさつ／名古屋大学における国際交流の現状／本学の沿革／名古屋大学における国際交流活動の沿革／名古屋大学の国際交流マップ／憲章／開校当初のお雇い教師／戦前の外国人教師／専任の「外国人教員」および外国人助手／郁達夫と第八高等学校／汪兆銘と名古屋帝国大学医学部／戦前名古屋の留学生宿舎／戦後名古屋大学の留学生／愛知留学生会と名古屋大学

このCDまたはパンフレットをご希望の方がございましたら、本ニュース最終頁の問い合わせ先までmail・FAX・郵便でお申し込み下さい。なお、当室のホームページ内（http://nua.jimu.nagoya-u.ac.jp/trails/index.html）でも閲覧できます。

資料室日誌（抄）

2月10日　㈶大幸財団より、名大元学長芦田淳資料寄贈。
2月13日　赤澤堯名大名誉教授より、名大元学長芦田淳資料寄贈。
2月27日　水田洋名大名誉教授より、資料寄贈。
3月3日　第2回名古屋大学大学史資料室ワークショップ『アーカイブズのすすめ－福井県文書館の設置について』開催。
宮内庁書陵部職員、澁澤元治名大初代総長の御前講義資料撮影のため来室。
鈴木えりも氏より、資料寄贈。
3月6日　大学史資料室運営委員会（第10回）開催。
大橋郁夫氏より、資料寄贈。
3月11日　関西学院大学大学院学生、資料室見学のため来室。
東京大学経済学部図書館文書室員、アーカイブの業務内容調査及び資料室見学のため来室。
3月18日　大学史資料室協議委員会（第9回）開催。
3月19日　名大教育学部附属学校図書室より、岡崎高等師範学校資料移管。
3月20日　深海英行名大名誉教授より、資料寄贈。
3月22日　神谷室員、東京都出張（国立史料館、国立国会図書館、24日まで）。
3月25日　山口室員、福岡・山口・神戸市出張（九州大学、山口県文書館、神戸大学、27日まで）。
3月28日　小木曽基弐名大情報文化学部教授より、資料寄贈。
3月31日　『名古屋大学史紀要』第11号、『名古屋大学大学史資料室ニュース』第14号、『名大史ブックレット6　草創期の名古屋大学と初代総長渋沢元治』、『名大史ブックレット7　名大祭－40年のあゆみ－』、『名古屋大学大学史資料室保存資料目録』第3集、『名古屋大学の軌跡－国際社会との知的交流－』（パンフレット、CD-ROM）刊行。
4月1日　フリー編集者、澁澤元治名大初代総長のビデオ制作に関する資料調査のため来室。
4月7日　名大教育学部附属学校より、事務文書移管。
4月9日　NHK情報ネットワークからの依頼によりビデオ企画制作者、澁澤元治名大初代総長のビデオ制作に関する資料調査のため来室。
4月15日　全学教養科目「名大の歴史をたどる」授業開始。
中田實名大名誉教授より、資料寄贈。
4月16日　名大施設部建築課より、文書移管。
4月24日　梅村佳代氏より、資料寄贈。
5月13日　龍田麻子氏より、故金子安之名大名誉教授資料寄贈。
赤澤堯名大名誉教授、名大元学長芦田淳資料寄贈のため来室。
5月19日　大学史資料室運営委員会（第11回）開催。
5月27日　大学史資料室協議委員会（第10回）開催。
6月2日　西崎淳子氏より、故金子安之名大名誉教授資料寄贈。
6月5日　名大工学部経理課より、事務文書移管。
6月11日　龍田麻子氏より、故金子安之名大名誉教授資料寄贈。
6月19日　名大附属図書館より、事務文書移管。
6月26日　加藤貞夫氏、資料撮影および資料寄贈のため来室。
7月3日　中西清和氏より、同志社大関係資料寄贈。
7月16日　永井義雄名大名誉教授、資料寄贈のため来室。

「伊藤圭介生誕200年記念展示会」が開催されます。

伊藤圭介は、幕末から明治にかけて活躍した、名古屋生まれの著名な本草学者・医者で、名古屋大学の歴史にも深く関係ある人物です。今回、名古屋大学附属図書館では、その伊藤圭介生誕200年を記念して、下記の通り「錦窠（きんか）図譜の世界―幕末・明治の博物誌―」という展示会を下記の通り行っています。当資料室も「伊藤圭介と名古屋大学」のコーナーで協力させていただきました。ぜひ一度ご来館下さい。

日　時：平成15年10月17日㈮～30日㈭　10：00～17：00（土・日とも）　＊休館日：10月23日㈭
場　所：名古屋大学附属図書館（中央図書館）展示室（4階）
入場無料（参照HP　http://www.nul.nagoya-u.ac.jp/event/index.html）
問い合わせ先：名古屋大学附属図書館情報管理課庶務掛
電　話：052-789-3667　E-mail：shomu@nul.nagoya-u.ac.jp

○『名大史ブックレット第６・７巻』と『名古屋大学大学史資料室保存資料目録第３集』を刊行しました

大学史資料室では、今年３月に『名大史ブックレット』の第６・７巻と『名古屋大学大学史資料室保存資料目録３』を刊行しました。

名大史ブックレットは、第６巻が『草創期の名古屋大学と初代総長渋沢元治』、第７巻が『名大祭―四〇年のあゆみ―』という内容です。第６巻は2002年４月８日から８月31日まで名古屋大学博物館と共催した名古屋大学博物館第４回特別展示『名帝大けふ誕生―初代総長渋澤元治とその時代』の展示をもとにまとめたものです。1939（昭和14）年名古屋帝国大学の発足から戦前戦中という苦難の時代におけるさまざまな課題に対し、それを克服して大学運営を軌道に乗せていった過程を、初代総長澁澤元治の努力をまじえながら紹介しています。第７巻は、なぜ名大祭が1960（昭和35）年にうまれ、その後40年のあゆみがどのようなものであったかについて述べ、今日における大学祭の意味を歴史的に考察したものです。いずれも新入大学院生・新入学部生をはじめ、一般の学生・院生・教職員の方も対象として、名古屋大学の歴史を簡単にわかりやすく解説したもので、手軽に読めるものになっております。

目録は大学史資料室が保存している資料のうち、他大学に関するものを「他大学関係資料」として収録しました。当室は他大学の年史や記念誌、その大学の歴史に関する紀要・研究書・概説書などを数多く保存しております。この目録をもって当室で資料閲覧されることにより、当室の資料が本学内外の様々な業務・調査・教育・研究などに、広く役立つことを望んでおります。

上記刊行物をご希望の方がございましたら、下記問い合わせ先まで mail・FAX・郵便でお申し込み下さい。また目録第１・２集・名大史ブックレット第１～５巻も配布しておりますので、こちらについてもご連絡をお待ちしております（本体無料、郵送料負担、なお目録については第１・２集とも残部僅少です）

なお大学史資料室では、名古屋大学に関係する資料を、学内外にかかわらず広く収集しております。本目録に収録されていない資料で、その所在をご存じの方がございましたら、これもまた大学史資料室までご一報ください。

名古屋大学大学史資料室ニュース 第 15 号
Nagoya University Archives News No. 15

名古屋大学大学史資料室
室　　長　加　藤　鉦　治（教授・併任）
専任室員　神　谷　　智（助手）
　　山　口　拓　史（助手）
事 務 員　増　田　よしみ

発行日　2003年10月15日（年2回刊）
編集・発行　名古屋大学大学史資料室
名古屋市千種区不老町〒 464-8601
電話＆ FAX： (052)789-2046
E-mail: nua_office@cc.nagoya-u.ac.jp
印　刷　株式会社荒川印刷
名古屋市中区千代田 2-16-38